

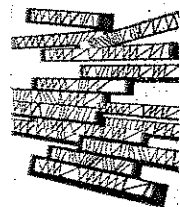
我が偏愛のピアニスト

青柳いづみこ 著

中央公論新社
四六判 288頁
本体2,000円+税

我が偏愛のピアニスト

青柳いづみこ



中央公論新社

インタヴューの仕事をか
れこれ20年以上やってい
る。楽しいと同時に、難し
いと思う。もちろん下調べ
をするが、大抵は初めて会
うので毎回うまくいくとは
限らない。経歴や音楽活動
や演奏から人柄を推測し、
今どんなことを考えている
のかを訊ねるのだが、同じ
質問をしても接し方や話の
持って行き方によって心を
閉ざしてしまう。売れっ子
音楽家の中にはいつもの話
を機械的に繰り返すだけの
人も。だからしばしば探り
を入れないが、ということ
になる。だからこの本を読
んでいて、つくづくうらや
ましいと思った。こんなイ
ンタヴューをしたみたい。
著者の青柳いづみこさん
は、ピアニストで文筆家。

『翼のはえた指 評伝安川
加壽子』(白水社)などの著
作の他、軽妙洒落なエッセ
イまであり、CDはここ数
年、カメラータからドビュ
ッシー等のディスクをリリ
ースしていて、どれもが彼
女の書く文章同様、知性と
柔らかなユーモアと良き趣
味に溢れたすてきな演奏で
ある。

これはそんな青柳さん
が、月刊「ムジカノーツ」
(2007年7月〜翌年12月
号)の連載に加筆し、練木
繁夫さんとの同級生対談を
加えたもの。まず、登場す
るピアニストの顔ぶれが興
味深い。岡田博美、小川典
子、小山実稚恵、坂上博子、
廻田美子、花房晴美、柳川
守、藤井快哉、海老彰子、
練木繁夫(本書の掲載順)

と、比較的若手に属する人
から伝説的な巨匠、人気ピ
アニスト、国際的に活動す
るベテランまで、世代もキ
ャリアもタイプも異なる実
に多彩な顔ぶれである。通
常のメディアや評論家だっ
たらもつと違った人選にな
るだろうが、そこにも青柳
さんの意図があるのだろ
う。共通項は青柳さんとな
んらかの個人的な接点があ
り、何よりも波長の合う

「偏愛の」ピアニストたち
ということ。だからもちろ
ん「探りを入れる」なんて
いう必要もない。
インタヴュー記事には一
問一答と、地の文の中に相
手の言葉を挟むスタイルが
あり、これは後者。ピアニ
ストの人柄や活動を紹介し
つつ、青柳さんの個人的な

関心を交えてそれぞれの個
性や特徴を浮き彫りにして
いくのだが、温かな眼差し
と共感に満ちた文体が心地
よく、読み進めるうちに彼
らに親しみが湧いてくる。
レガートを弾くときの手の
形(小山実稚恵さんの回)
や作曲家や作詞論などご自
身が優れたピアニストであ
ると同時に、大阪音楽大学
教授として多くのピアニス
トを育てている教育者なら
ではの具体的で専門的な話
題も多い。とりわけ、スイ
スを拠点に活躍する坂上博
子さんの回はこれからの時
代の音楽家の生き方を示唆
しているようでとても興味
深かった。練木繁夫さんと
の対談も楽しい。同級生同
士の親しい雰囲気の中で練
木さんのこれまでのキャリ
アや音楽観、音楽教育やコ
ンクールに対する考察へと
次から次へと話題が展開し
ていくのだが、内容は核心
を突いていて音楽文化論に
もなっている。読み終えて、
彼らのコンサートが聴きた
くなった。そんな気持ちに
させてくれるピアニスト本
である。

■那須田 務

作曲の思想

音楽・知のメモリア

小鍛治昇隆 著

アルテスパブリッシング
四六判 180頁
本体2,200円+税

バッハ以降、作曲家た
ちに受け継がれた「記憶」
と、音楽を生む各時代の
文化体系。作曲家がそれ
ぞれの楽曲に託したもの、
その「知の系譜」とは何
か? 音楽学者・沼野雄二
氏との刺激的対談も併録。



交響曲の聴きどころ

諸井誠 著

音楽之友社
四六判 272頁
本体2,500円+税

『音楽の聴きどころ—
交響曲』の増補改訂版。
楽曲の構成の把握から捉
えた「聴く楽しみ」、フル
トヴェングラーの《運命》
分析や交響曲10作品のタ
イプ別解説など、「聴きど
ころ」を読む一冊。



ピアノと向きあう

芸術的個性を育むために

奥千絵子 著

春秋社
A5判 352頁
本体2,400円+税

演奏家としても活躍す
る筆者が綴った「練習の
ヒント」集。いかに効率
よく練習を積み、表現に
結び付けるかが分かりや
すく、かつ的確に解説され
ている。レスナー、指導
者にとって必読の内容だ。

